

淺草彈左衛門

第二部

塩見鮮

塩見鮮一郎（しおみ・せんいちろう）

1938年 岡山市生まれ

1963年 岡山大学文学部卒業。河出書房新社編集部を経て、現在、作家。

著 書 『黄色い国の脱出口』（田畑書店）

『告別の儀式』（田畑書店）

『巫女たちの夏』（筑摩書房）

『表現の装置』（批評社）

『言語と差別』（せきた書房）

『ハルハ河幻想』（せきた書房）

『都市社会と差別』（れんが書房新社）

『浅草弾左衛門』第一部（批評社）

『浅草弾左衛門』第三部（批評社）

浅草弾左衛門 第二部 ©Shenichiro Shiomi

* 0030-86078-7189

1986年11月25日 初版第1刷発行

定価3500円

1988年1月25日 初版第2刷発行

著 者 * 塩見鮮一郎

装 幀 * 貝原浩十山猫通信社

題 字 * 村山静子

発行所 * 尙批評社

東京都文京区本郷2-6-15 電話03-813-6344

印 刷 * 俵文昇堂

製 本 * 越後堂製本

淺草彈左衛門

塩見鮮一郎

第二部

批評社

目次

その一	世相転形の巻	7
その二	天変地異の巻	117
その三	日暮れ前の巻	219
その四	身分引上の巻	327

浅草弾左衛門

第二部

その
一

世相
転形
の巻

腰を突きあげられて目覚めた。掛物の軸が壁にあたるせわしない音がする。雨戸が軋み、鳴った。暗闇に手をつき、敷蒲団にすわった。

一年まえの善光寺での大地震では、何万もの人が死んだ。その記憶が頭をかすめる。読売、一枚摺り、絵草紙がおびただしく売られ、その惨事を伝えてきた。ちょうど善光寺は御開帳ちゅうであつた。その日、全国津々浦々から参集していた者、一万にちかかった、という。そこに地震だ。往還筋の旅籠も、坊舎も、門前町もあらかた倒壊、焼亡した。ただ本堂だけは無事で、そこへ逃げこんだ信心篤き千人の者は一命をとりとめた。

昨弘化四年【一八四七年】三月二十四日、夜五つ時【八時】であつた。

善光寺と、周司のいる筑摩郡出川村【松本市】とは、かなりの距離である。なのに、兄彦太夫の家も傾き屋根瓦が雨のように庭に落ちて砕け散乱した、と伝えてきた。また、地面が裂けてそこに農家がすっぽりと呑みこまれている、とも書いてきた。四月になり、五月になっても、大地の身ぶるいはやまない、と、その恐怖を訴えるとともに、江戸を恋しく思う気持をのぞかせていた。

まだ天井が揺れている。彼直樹は手探りで薄い掛蒲団をつかむと、肩にかけた。息をつめ、それでも、庭に逃げだすほどではない、と思った。

「あなたさま」

と呼ぶ、お加代の声を廊下に待ったが、その気配はない。書見をするにお麻がうるさい、と三年まえに寝間を別にした。お加代を不憫に思わないわけではない。だが、お加代はお加代で、お麻を乳母にもまかせないほど溺愛すること、寂しくしているふうではない。いまでも、五つになるお麻の怯えるのを、しっかりと胸に抱きしめているであろう。

額から月代にかけての汗を掌でぬぐった。揺れはおさまったのに、不安だけが残った。地震は世直りだと、江戸ではいう。恐れ戦きながらも、この天変地異がなにもかもを変えてくれるのを待ち望む。彼にも、その気持がないわけではない。ご改革は遠ざかり、諸式万般のゆるんだものの、景気はいっこうによくならず、弾家の借財は五千両におよび、なお、年々百両をこす不足である。

「どうにかならぬか」

雨戸の隙間をもれた光が障子に映えているのを見つめた。

弘化は五年で、その実際は三年少々で、この春に嘉永となったが、この間、ご奉行から聞こえてくる話は、やれ英吉利船が琉球に渡来したとか、やれ亜米利加船が択捉島に漂着したとか、やれ仏蘭西船が長崎に来航したとか、夷狄のことばかりであった。海防が強調され、あちこちに大砲を備えつけたお台場ができたそうだが、一方、江戸下町から百文銭がまったく姿を消すとい

う不思議な出来事は、すでに半年もたつのに直ろうとしない。

どふか弘化こうかと思ひしに、当三月の十五日、改元かいげん有て嘉永かえい【痒えー】とは、かゆひ処ところへ手が届き、御屋敷方ごやしきかたは儉約けんやくにて、こわれ次第しだいで普請ふしんせず、大工はひまで仕方なく……銭ぜに払底はらてで商内しょうないなく、四文の買物に金きんを出し、そばやめしやや酒屋りやうかやにて、喰くたる上にて金きんを出し、釣つりがなければかりてゆく、兩替屋りようかえやにも銭ぜにがなく、売溜うりだけ【を】売うりて誉ほめらるる。

といったありさまで。

「鹿島明神かしまあきじん【茨城県】の鯰なますめ、暴れるならば、背を押さえつけてる要石かなめいしをふっとばすほど暴れてみろ」

彼は胸の重苦しさを吐きだすようにつぶやき、立ちあがった。そろそろ明六あけむつ【六時】だろう。障子を開け、背から畳にすべり落ちた掛蒲団をそのままにして、廊下へ出た。

雨戸を引くと、冷気がすがすがしく素足を包み、明けていく空が目を射た。

「御前ごぜんさま、お目覚めで」

雨戸の音を聞きつけてか、腰の曲がった宮尾が、下女のひとりをつれて廊下のさきにいた。

「はっは、なみふる、【地震】で起こされたわ。べつに異状はないか」

苦笑して、女中頭にいった。

「はい。割れたものも、なにひとつございせん。あの、すぐに朝湯をつかわれますか」

「ふむ」

繁忙をきわめるなかにあって、朝湯は唯一の楽しみである。

「これ、お湯加減をおしろに聞いておいで」

宮尾が、うしろに控えている下女にいった。

「よいわ。わしが行ってみよう」

着崩れていた寝間着のまえをあわせ、奥へむかった。正面が女中部屋で、その右手の台所からは、朝餉あさぐいのおいとともに、飯焚料理番の指図する声、菜を刻む音などが伝わってくる。そこを左へ折れると湯殿ゆどのであった。

「あれ、ま、左衛門さま」

蓋板ふたいたで湯をかきまぜていたおしろが驚き、粗相でもしたかのように、泣きべその顔になった。

「早すぎたか」

あわてた。

「あの、まだ沸わかいておりません。申しわけございません」

おしろは棒立ちになっている。赤い指から、水がしたたっている。着物の裾すそは濡れないようにと、たくしあげられていた。無双窓むそうまどからはいるわずかな明かりに、脚が白かった。股の内側に湯文字ゆもじ【腰巻】が、ちらついていた。彼の目に気づいたのか、霜焼けの指が、帯紐おびしるにはさんでいた裾を、抜きとった。

「ぬるくてもかまわぬわ。もう寒い季節ではないからのう」

「は、はい。あの、どんだん、薪、燃やします」

おしろは湯殿から走り出た。

湯はぬるかった。軽くからだを浮かせ、さきほどの、羞じらいをふくんだおしろの所作を思った。燈心長屋の浅兵衛は、ちいせえときからおつむが少々たりねえでござんす、といったが、ここにきて六、七年、女中たちとまじわるうちに、あのような仕草も覚えたか。

「おしろ、地震は恐かったか」

板壁の外、風呂の焚口たきぐちにいるおしろにいった。

「お、お湯がちゃっぽんちゃっぽん、大暴れますすで、ほんに恐くて、生きた心地もしませんでした」

おしろは、大きな声で、ちゃんとこたえた。

彼は笑った。湯に気分がほぐれてくるまま、まだ笑いの残る声でいった。

「おしろ、焚くのはそれぐらいでよいわ。こちらにきて、糠袋ぬかごうで、背でも洗ってくれぬか」

「あいう」

背を流させるのははじめてであった。おしろはとまどっている。

「よいではないか」

「は、はい」

彼直樹は息をつめて待った。白粉おしろいを塗っていない顔が、ぼうと赤ばむのを心に描いた。島田しまだ髻まげのほつれ毛が額ひたいに落ちているだろう、と思った。

やっと星が消え、薄い雲が赤みをおびる。いつもと同じ細い道を、余はのぼっていた。

地鳴りとともに、まだ暗い足もとが揺れた。こすれあった木の葉が、にわか雨にでも打たれたような音をたてた。ばらばらと小石が転がり落ちてくる。左手にある一本松の根方まで笹を踏んで走った。二度、草露に素足をすべらせて、よろけた。また善光寺さんやろか。右手の鉤を、盛りあがった厚い松の皮に打ちこんだ。

激しかったが、揺れは早く去った。日が顔を出し、丘のあいだを谷になって流れる桂川が光った。しばらく眺めて待ったのち、余は道にもどり、田の広がる台地へと駆けのぼった。田植は終わっている。が、早苗はまだ根をはってなく、水に浮いて見えた。水は桂川の上流より引いてくる。

田のはずれの草むらに、くたびれた柿の木がある。黒っぽいものがちらついている。やはり蠅だ。

「どっこい、しめたの森【信田の森に掛ける】やあらへんか」

余は、ついさきほどの地震も忘れて、欣喜して走った。

柿の木のそばに、朽ちかけた丸太で方丈【三メートル四方】の囲みがある。捨場と呼んでいる。余はその見廻役を、かれこれ五年もつづけている。

思ったとおりだった。骨のかたちがそのままのままわかるほど瘦せた馬が、硬直した四肢を投げだして横たわっていた。前脚二本は縄で縛られ、百姓がここへ投げ捨てたときのままだ。後脚も同じだった。縄ぐらいほどいて寝させてやらんかい、一生こきつかったのやさかい。だが、余はつっ立ったまま、朝日を浴びた銀蠅が、馬の鼻面に何十匹とむらがっているのを、眺めていた。

「四ヶ月ぶりや」

心月寺裏のつぎの捨場にむかわずに、余はいまきた道を、桂川にむけて急いだ。

「ほんま、仁兵衛はんちの老いばれ馬やった」

余の親方で非人小屋主の綾兵衛は、齒のない口をもぐもぐと動かして、こんだ、仁兵衛さんとのととずら、この夏よ、といつもいってた。予言は当たった。ほんま、暑くなるまで、もたへんかった。馬銚引いて田を掻くのにくたびれはてたんや。けど、ええ日に死んでくれたわ。あと二日も遅かったら、大月村の穢多の物や。

朔日【一日】から十日までが猿橋村、十一日から二十二日までが大月村、二十三、四日が上鳥沢村、二十五日から晦日までが下吉田村という日割りであつた。今日は五月九日だから、猿橋村の穢多小屋頭直蔵の取得になる。直蔵はんが場主や。余はそれが嬉しかった。

雨水をためた小さい池のそばの穢多村に、藁葺きの直蔵の家はある。猫の額ほどの田もあるが、水をはったままで、田植はまだだ。